
カロリング期における歴史叙述抜粋集の 社会的論理

ヘルムート・ライミッツ

〈プリンストン大学〉

20年ほど前にガブリエル・M・シュピーゲルは、「歴史、歴史主義、そして中世におけるテキストの社会的論理」と題する論考を發表しました¹。私の考えでは、この論文はなお、言語論的転回が中世テキストの研究に有する意義を論じた最良の論考の一つです。Speculum 誌に掲載された彼女の論文は、当時新文献学と呼ばれていた動向の展望を扱った特集の一部を構成しています。この号では数多くの中世史家が、フランスのポストモダニズムに刺激されたテキストに関する新たな概念やアプローチに伴って生じる異議申し立てや好機について考察しました。ポストモダンの新たなテキスト概念は文学作品の意味を、作者「その人」との入り組んだ関係とみなされたきたものを越えて、作品の生産と受容という社会的現実にもまで広げました。よく知られるようにバルトが記号学の冒険と呼んだものにおいて、テキストは単に「意味」としてだけではなく、「またシニフィアンとして、すなわち発見されるべきひとつの意味をそなえた閉じられた記号群ではなく、位置をずらしつつある痕跡の総量として」理解されることになりました²。

「記号学の冒険」は、近代的な学問分野として確立して以来、多様な版や組み合わせでわれわれの手元に伝わってきたテキストや記録を再構築し、解釈するために複合的な道具立てを發展させてきた中世研究にとっては、とりわけ新たな挑戦とチャンスを示すものでした。テキストを一つの排他的な形態と現実にもまで減じるアプローチに対して、ポストモダンの文学理論と哲学とが向けた根本的な批判は、多くの中世史家にとって歓迎され、テキストと現実の関係という強力ではあるもののより単純化された観点を洗練させるよう促しました。たしかに中世史家は、シュピーゲル論文が發表される前の数十年のあいだに、新たな歴史研究のアプローチを發展させるのに重要な役割を果たしました。たとえば、旧来の歴史研究の狭小な関心と主題に対するアナール派の批判は、見たところよく知られた史料を見慣れないものにするのに貢献し、それまで等閑にされてきた証拠やトピックに関心を向けるのに役立ちました³。しかし中世史家たちは、彼らが用いる文学史料が旧来の歴史研究で獲得した権威を問題にするにはいたりませんでした。この点で中世史家たちはなお、原テキスト＝祖型に過去への鍵を見る、19世紀のあいだに確立された見方がもたらした結果の上に成果を築いていたのです。実証主義イデオロギーの野心的な計画というコンテキストにおいて、また実用的な近道をとった結果として、「オリジナル」テキストの真正性と現実が「一貫性と自明性とを獲得し、

1 Gabrielle M. Spiegel, 'History, historicism and the social logic of the text in the Middle Ages', *Speculum* 65 (1990), pp. 59–86. 同じく彼女の論文集 *The Past as Text. The Theory and Practice of Medieval Historiography* (Baltimore and London, 1997) 参照。なお、私の英語をチェックし、有益なコメントを下さった Jamie Kreiner 氏に感謝したい。また、Walter Pohl, Pavlina Rychterova, David Ganz, Max Diesenberger 諸氏に対して、本稿のもととなる原稿を読み、きわめて有益なコメントを下さったことに感謝したい。本研究は2010年に Walter Pohl に承認されたヨーロッパ研究協議会の先進的研究プロジェクト「ヨーロッパにおける社会的結合、アイデンティティ、宗教」の支援にもとづく成果である。

2 Roland Barthes, 'The semiological adventure', in *The semiotic challenge*, trans. Richard Howard (Berkeley and Los Angeles, 1994), p. 7.

3 Georg G. Iggers, *Historiography in the Twentieth century. From Scientific Objectivity to the Postmodern Challenge*, new edition with a new epilogue (Middletown, 2005) 参照。

それらはときに、19世紀に行われた、損傷した中世の建物や絵画の復元をわれわれに想起させるようなものです⁴。方法論的に高度に洗練された議論が祖型を復元するための複合的な道具一式を作り上げたのに対して、「オリジナル」と写本の現実との遮られた関係は、副次的なものとして位置づけられました⁵。しかし、第二次世界大戦後の数十年のあいだに、ますます多くの歴史家が生身の人間を探し求め、調査のための新たな史料を発見しながら、使用できる素材について新たな問題を投げかけました。増加する人食い人間が、彼らが食い物にするテキストの多種多様な社会的現実を認識するようになるのは、時間の問題でした。テキストを、実践を意味するものとして、絶えず作用と駆け引きとが働くものとして、位置を変えつつある痕跡の総量と見る新たな捉え方は、ハンターたちの中でもとくに中世史家に、価値あり歓迎すべき道具を提供したのです。

中世史家がポストモダン批評に応じたのみならず、その経験論的基盤の確立のために提供すべきことを沢山有していたのは確かです⁶。とりわけ、オリジナル・テキストの編纂が要求する作業は、テキストを伝える多様な異本から祖型を復元する作業を含んでいるため、中世テキストの本質的に不安定な性質を印象深く明示する豊富な事例を蓄積することになります⁷。関心と経験の明白な重複が、とくに1990年代に実り豊かな交流へと導きました。より開かれたテキスト概念を可能にする新たな観点が、中世学の多様な分野にわたって採用され、検証され、発展しました。すでにスティーヴン・ニコルズが *Speculum* 誌に特集号を組んだ数年前に、彼自身は新しい文献学を物質的文献学として精緻なものにしました。彼は、仮説に基づいて復元されたオリジナル・テキストとその伝達という恣意的な区分を乗り越えるために、文学作品は現存する写本に物的に存在するものとして分析されるべきであると提案しました⁸。ヨーロッパにおいてもアメリカ合衆国においても、中世学者はその射程を取り上げ、発展させました。現存する写本におけるテキストの物的形態を、テキストの意味を構成する不可欠な部分として考察の対象とするこうしたアプローチのための用語上の道具立ては、1987年に「パラテキスト」についての研究を発表したジェラルド・ジュネットによって導入されました⁹。それ以来、とりわけ（ゲルマン語・ロマンス語文献研究のような）文献学諸分野は、伝わる諸テキストが差し出す新たな研究の可能性や、それらテキストをデジタル版で表示する新たな方法に集中的に取り組みました¹⁰。しかし、歴史家もまた次第に、ベルナルド・セルキリーニの言う「異文の称賛」に加わるこ

4 Walter Pohl, 'History in fragments. Montecassino's politics of memory', *Early Medieval Europe* 10 (2001), pp. 343–74, here 346; see also id., *Werkstätte der Erinnerung. Montecassino und die Gestaltung der langobardischen Vergangenheit* (Wien, 2001).

5 Hartmut Hoffmann, 'Die Edition in den Anfängen der Monumenta Germaniae Historica', in *Mittelalterliche Texte. Überlieferung — Befunde — Deutungen. Kolloquium der Zentralkommission der Monumenta Germaniae Historica*, ed. Rudolf Schieffer, MGH Schriften 42 (Hannover, 1996), pp. 189–232 参照。原典を復元する最善の方法に関する激しい議論はすでに、*Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde* (1820ff.) の最初の数巻に見られる。「祖型」に結びついた方法論とイデオロギーの発展の歴史一般については、Sebastiano Timpanaro, *The Genesis of Lachmann's Method*, transl. Glenn W. Most (Chicago, 1995) 参照。

6 中世研究とポストモダン研究が相互に実りをもたらすことについては、Bruce Holsinger, *The Premodern Condition: Medievalism and the Making of Theory* (Chicago, 2005) 参照。

7 *Mittelalterliche Texte. Überlieferung — Befunde — Deutungen*, ed. Rudolf Schieffer; *Mittelalterliche Textüberlieferungen und ihre kritische Aufarbeitung* (München, 1976) 所収の試論と比較せよ。

8 Stephen Nichols, 'Why Material Philology? Some Thoughts', in *Philologie als Textwissenschaft. Alte und neue Horizonte = Zeitschrift für deutsche Philologie* 116 (1997), Beiheft, pp. 10–30.

9 Gérard Genette, *Seuils*. Paris, 1987; engl. transl. *Paratexts. Thresholds of interpretation* (Cambridge, 1997).

10 たとえば、Martin Baisch, *Textkritik als Problem der Kulturwissenschaft. Tristan-Lektüren*. Berlin and New York, 2006; the special theme: 'Überlieferungsgeschichte — Textgeschichte — Literaturgeschichte', *Jahrbuch für Internationale Germanistik* 34 (2002); *Medievalism and the Modernist Temper*, eds. R. Howard Bloch and Stephen G. Nichols, Baltimore, 1996; *Philologie als Textwissenschaft. Alte und neue Horizonte*, eds. Helmut Tervooren and Horst Wenzel = *Zeitschrift für deutsche Philologie* 116 (1997), Beiheft 参照。デジタル版の編纂については、その潮流とプロジェクトの紹介と議論が継続して行われている。*Jahrbuch für Computerphilologie* 1ff. (1999ff.) <http://computerphilologie.uni-muenchen.de/ejournal.html>, Jan 1, 2012 や *Digital Medievalist* 1ff. (2001ff.) <http://www.digitalmedievalist.org/journal/>, Jan 1, 2012 参照。

とになりました。中世テキストの異なるヴァージョンのあいだに見られる相違と類似をまとめ、それらを仮説に基づいて復元されたオリジナルにしたがってランク付けする代わりに、中世のテキスト文化への新たな入口と史料を復元すべく、関心の中心を相違そのものに向けるようになったのです¹¹。

新たなアプローチは新たな好機を与えただけではありません。新たな挑戦状も突きつけました。とりわけ、テキストと現実の関係という問題です。ヴァルター・ポールが10年ほど前にこう述べていた通りです。

「歴史家と言語学者は、方法を議論するとき、しばしば現実という根本的な問題に関して行き詰まる」¹²。

実際のところ、歴史研究にとっての現実の問題は、文学や記号学の研究にとってのそれと異なります。最近ヘイドン・ホワイトは次のように指摘しています。

「……批評がある人自身や別の人の言説の中に表現の形式的な構造や、意味や価値を識別し、論理的もしくは芸術的一貫性に関してこれらを調査するという考えをこえて意味を有する限りにおいて、この意味は、あらゆる事柄の縮減できない「歴史性」を同定しようとする試み以外の何ものでもない。そしてこれは、ある事柄の時空間における関係を識別し、それがそのコンテキストや環境と関連づけられる方法を同定し、この結びつきによって可能となると同時に骨抜きにされる程度を確定することを意味する」¹³。

現存するテキストを歴史の史料として理解する際に歴史家は、これらテキストの「コンテキスト上の指示

11 中世初期研究に関しては、挙げられている文献を含めて、以下に収録されている様々の論考を参照。Zwischen Niederschrift und Wiederschrift. Frühmittelalterliche Hagiographie und Historiographie im Spannungsfeld von Kompendienüberlieferung und Editionstechnik (Vienna, 2010). 私が仕事をしアプローチを発展させてもらったウィーンの仕事場については、Pohl, *Werkstätte der Erinnerung*; id., 'History in fragments'; id., 'Einleitung: Vom Nutzen des Schreibens', in *Vom Nutzen des Schreibens. Soziales Gedächtnis, Herrschaft und Besitz*, eds. Walter Pohl and Paul Herold (Vienna, 2002), pp. 9-19; Helmut Reimitz, 'Anleitung zur Interpretation. Schrift und Genealogie zur Karolingerzeit', in *ibid.*, pp. 167-81, id., 'Der Weg zum Königtum in historiographischen Kompendien der Karolingerzeit', in *Der Dynastiewechsel von 751. Vorgeschichte, Legitimationsstrategien und Erinnerung*, ed. Matthias Becher and Jörg Jarnut (Münster: Scriptorium, 2004), pp. 283-326; id., 'Ein karolingisches Geschichtsbuch aus St. Amand: der Cvp lat. 473', in *Text, Schrift und Codex. Quellenkundliche Arbeiten aus dem Institut für Österreichische Geschichtsforschung*, ed. Christoph Egger and Herwig Weigl, Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung, Ergänzungband 34 (Vienna and Munich, 2000), pp. 34-90を参照。また Richard Corradini, 'The Rhetoric of Crisis: Computus and Liber annalis in Early Ninth-Century Fulda', in *The Construction of Communities in the Early Middle Ages Texts, Resources and Artifacts*, ed. Richard Corradini, Max Diesenberger, Helmut Reimitz (Leiden and Boston, 2003), pp. 269-321; id., 'Die Annales Fuldenses — Identitätskonstruktionen im ostfränkischen Raum am Ende der Karolingerzeit', in *Texts and Identities in the Early Middle Ages*, ed. Richard Corradini, Rob Meens, Christina Pössel and Philip Shaw (Vienna, 2006), pp. 121-36; Maximilian Diesenberger, 'Der Cvp 420 — die Gemeinschaft der Heiligen und ihre Gestaltung im frühmittelalterlichen Bayern', in *Les réécritures hagiographiques dans l'Occident médiéval. Atelier III: L'hagiographie mérovingienne à travers ses réécritures*, ed. Martin Heinzlmann (Ostfildern, 2010), pp. 221-50; id., 'How Collections shape the Texts: Rewriting and Rearranging Passions in Carolingian Bavaria', in *Livrets, collections et texts. Études de la tradition hagiographique latine*, ed. Martin Heinzlmann (Beihefte der Francia 63, Ostfildern, 2006), pp. 195-224参照。

中世初期における歴史叙述と聖人伝の伝達に関するこれらのアプローチは、21世紀初頭までウィーンで教えていた Brigitte Resl (Liverpool) に負うところが大きい。たとえば、Brigitte Resl, 'Ein Passauer Historikerstreit im 13. Jahrhundert: Ein Versuch, die Geschichte stillzulegen', in *Text — Schrift — Codex. Quellenkundliche Arbeiten aus dem Institut für Österreichische Geschichtsforschung*, eds. Christoph Egger and Herwig Weigl (Vienna and Munich, 2000), pp. 286-303; 'Vom Nutzen des Abschreibens — Überlegungen zu mittelalterlichen Chartularen', in *Vom Nutzen des Schreibens. Soziales Gedächtnis, Herrschaft und Besitz* (Vienna, 2002)。

また Patrick Geary, *Phantoms of Remembrance. Memory and Oblivion at the end of the first Millennium* (Princeton, 1996) によるインスピレーションも大きい。

カロリング期のリテラシー研究の先駆者である Rosamond McKitterick が、歴史叙述抜粋集に関する私の研究に与えた影響は明らかである。たとえば、*The Carolingians and the Written Word* (Cambridge, 1989) やより新しい研究として、*History and Memory in the Carolingian World* (Cambridge, 2004) 参照。しかしマキタリクは、彼女の研究を記号学からの挑戦と結びつけていない。

12 Pohl, 'History in fragments', p. 346.

13 Hayden White, 'Afterword. Manifesto time', in *Manifestos for History*, ed. Keith Jenkins, Sue Morgan and Alun Munslow (London and New York, 2007), pp. 220-213, here 224.

物」、これらテキストとテキストをこえた現実との関係を見極めるよう努めなければなりません。「歴史学の方法を構成するのは、テキストとコンテキストとのあいだの継続的な緊張関係なのです」¹⁴。もちろんこのことは、われわれの歴史史料の意味が相違と偶然性の作用に服しており、われわれが「歴史におけるテキスト布置」の多様なプロセスにおける基本的な非連続性を受け入れなければならないとするポストモダン批評の洞察に見切りをつけることと同じではありません。けれども、数十年前にミシェル・フーコーが指摘したように、われわれが偶然性と非連続性を歴史のカテゴリーとしてすすんで受け入れるのであれば、われわれもまた、できる限り正確に、特定の歴史的コンテキストにおいてそれらが現れる条件や状況、それらの出現を操作する限界や機会、あるいは余地を明らかにしなければならないのです¹⁵。私の考えでは、徹底した（幸福な）実証主義¹⁶へのフーコーの要求はなお、大切なものを無用なものと一緒に捨て去ることのないように歴史家を論ずるものとなり得ます。テキストへのポストモダンのアプローチを熟慮することで、歴史研究は社会的なるものをテキスト的なるものに吸収させることで済ませたり¹⁷、最終的に、皮肉にも、過去の現実への主要な鍵として祖型を重視する旧式中世研究のアプローチによく似たように見える、テキストと現実の関係を扱うことになってしまうことの無いように注意しなければならないのです。

本稿のタイトルが引用する論考の中でシュピーゲルは、早い時期からこの問題に気づいていました。「テキストの社会的論理」の探究を提案する際に彼女は、文芸批評と歴史学双方の必要を満たすことを可能にするアプローチを練り上げました。文芸批評と歴史研究は分かれてはいるものの、相互に補い合う学術分野であり、過去におけるテキストの生産が有する社会的次元に対する関心を共有しています。シュピーゲルはテキストを、状況に応じた言語使用を表すものとして理解するよう提案します。すなわち、言語は生きられた出来事としてあり、それらは基本的にもともとローカルなものであり、特定の社会的論理に決定されるという観点です。シュピーゲルが指摘するように、この理解は、言語それ自体を歴史家の道具で検討すること、つまり言語を在地や地域の社会的コンテキストの内部で、コミュニケーションのシステムや権力ネットワークの内部で捉えることを可能にします。こうしたコンテキストが言語の意味の特殊な屈折を説明してくれるのであり、かくしてその多様な文化的な意味を回収するのを手助けしてくれるのです。こうした観点から見れば、あらゆるテキストは特定の社会空間を占めるものとして現れ、作者の社会的世界の産物であると同時に、能動的に作用を及ぼすエージェントとみなされなければなりません。テキストは社会の現実を反映すると同時に社会の現実を生み出すのです。テキストは社会や言説の編成によってつくられるとともに、それらを構成するのを助けるのであり、テキストはそうした編成物を強化したり、それらに異議を申し立てるか、あるいはそれらを変容させようとするのです¹⁸。

言語論的転回が突きつけた挑戦状と逆に提示したチャンスに関するシュピーゲルの議論は有名になったとはいえ、彼女がこの論文で提示する方法論上の道具は意外にもあまり影響力を持ちませんでした。それはあるいは、シュピーゲルがその方法を例示する際に、テキストのある一般的なカテゴリー、すなわち系譜として構造化された中世盛期の年代記や、偽チュルパン年代記とその古仏語への翻訳というある特定のテキストの伝来を取り上げた事実と関係があるかもしれません。多くの同僚の目には彼女が、中世の著者や作者自身ではなく、近代歴史学による概念化によってテキスト「ユニット」として構成された事例に焦点を定めてい

14 Pohl, 'History in fragments', p. 346.

15 Michel Foucault, *L'ordre du discours* (Paris, 1971), p. 57f.

16 " ..., et disons, pour jouer une seconde fois sur les mots, que si le style critique, c'est celui de la désinvolture studieuse, l'humeur généalogique sera celle d'un positivisme heureux." Foucault, *L'ordre du discours*, p. 72.

17 Spiegel, 'History, historicism', p. 84f.; Pohl, 'History in fragments', p. 346.

18 Spiegel, 'History, historicism', p. 77f.

るように映ったのでしょうか。経験に基づいて新たな批判的アプローチの主張を守るべく、中世の伝来の多様性と偶然性が強調されていた時にあって、シュピーゲルの提案はそれほど急進的に思われなかったか、あるいはおそらくは因習的な解釈と分類のモデルにあまりにも根ざしているように見えたのでしょうか。しかしながら、系譜の構造を持つ年代記と『シャルルマーニュの歴史 *Historia Karoli Magni*』の諸版を検討しながら、彼女は個々のテキストを出来事として、状況に応じた言語使用として探究しています。それらテキストの著者は単になんらかの言葉を使っていたにすぎないのではないのです。彼らは特定のテキスト伝承を用いて作業するのを選び、この伝承を持続させるのであり、このテキスト伝承の社会的論理はある程度まで、テキスト操作をこの社会的論理の価値と意味に基づかせ、新たなコンテキストに適合させる余地を提供するとともに限定したのです。

その後20年がすぎましたが、彼女の考察は、写本に見られるテキストの物的次元を、テキストとそれらが書かれた社会的現実との「よりリアルな」関係への近道とみなさないようにとする意見表明として理解することもできるように思われます¹⁹。しかしながら、新文献学もしくは（後に）物質的文献学とさえ呼ばれるようになったアプローチを用いる学者の大半でさえ、写本伝来におけるテキストの社会的論理を探究するためにシュピーゲルの提案に支えを求めませんでした²⁰。1990年代という時代状況においては、中世学者たちにとって、十分に確立され、なお影響力を有する旧来の「史料・テキスト批判 *Quellen-und Textkritik*」を考慮して、ある特定の写本の個性や独自性を強調する方が重要だったのかもしれませんが、しかし、私自身の研究領域である中世初期史においてとくに重要となった問題、すなわちテキストの執筆と書き直し (*écriture et réécriture, Niederschrift und Wiederschrift*)²¹のプロセスにおいてテキストの歴史やテキスト伝来に焦点を定めるより最近のアプローチでさえ、大部分はシュピーゲルの提案を発展させていないのです²²。こうした状況ですから、「歴史におけるテキスト布置」について考察するよう招かれたのを良い機会として、メロヴィング期とカロリング期から伝わる歴史叙述史料についての私自身の研究から事例を取り上げることで、これらのアプローチをより明瞭に結び合わせたいと思います。

シュピーゲルに同意して、われわれがアプリオリにあるテキストの社会的機能やその文化的位置を確定するのを避けるよう努め、所与の作品の形式と内容の丹念な調査のみが、作品とそのコンテキストとの関係を

19 写本に見られる痕跡の多くが、成立の際の状況やあり得た社会的作用をより正確に定めるのを手助けするのは確かであるし、近代の刊本においては祖型を確定する努力の中でこれら痕跡の多くが無視されたり隠されたりしてきたことも事実である。しかし、原テキスト復元に注いだ学者の努力は、史料批判という高度に洗練された優れた方法を発展させるよう導いたのであり、それらを簡単に手放すべきではない。また、これらの方法によって生み出されたテキスト刊本を、テキストが依拠する写本伝来と対置すべきではない。また、近代の良質の批判的校訂本がたとえ複合的で脆くとも、それはテキストがどのような構築されたかをたいていは明らかにするから、今なおテキストがもともと生み出された現実とどのような関係にあったかを批判的に評価し、さらにテキストの伝来の意義を知るのを可能にする。あるいは、少なくとも、テキストの社会的論理を考察するための出発点を与えてくれる。ある刊本とそれに付随する出版物（たとえば「伝来研究」に関する *Monumenta Germaniae Historica* による叢書）がこうした情報を与えるか否かは、むしろ質の問題である。

20 一つの好例は、以下の書物に Stephen Nichols が書いている序論である。 *The Whole book: cultural perspectives on the medieval miscellany*, ed. Stephen G. Nichols and Siegfried Wenzel (Ann Arbor, 1996), pp. 1-6. そこでニコルズが行っている指摘の多くは、中世の文集におけるテキストとコンテキストの関係を社会的論理という概念に結びつけるところに近づいているが、彼は個性を強調する方向に向かうのを決心した。こんにち彼自身は、その方向を取ることが当時必要な戦略であったとコメントしている。「当時の主流の見解は、多様性を最小化したり、あるいは少なくとも嘆こうと努める学者らが批判的に確定した「固定したテキスト」を強力に擁護する見方であり、それを前にして必要な矯正策を講じる必要があったため、こうした立場を取った」 (Abstract of his paper at the conference in Ghent: Between Stability and Transformation. Textual Tradition in the Medieval Netherlands. September 2010, <http://www.stabilityandtransformation.ugent.be/>, Jan 1, 2012. この研究集会の組織者であり、出版予定の会議録の編者の一人である Youri Desplenter が、2013年に出版予定であることを親切にも教えてくださった)。

21 たとえば、 *Zwischen Niederschrift und Wiederschrift*, eds. Corradini, Diesenberger and Niederkorn-Bruck; Monique Goulet, *Écriture et réécriture hagiographiques. Essai sur les réécritures des Vies de saints dans l'Occident latin médiéval, VIII^e-XIII^e s.* (Turnhout, 2005); *Miracles, vies et réécritures dans l'Occident médiéval*, ed. Monique Goulet and Martin Heinzlmann (Osfieldern, 2006) と比較せよ。

22 Pohl, 'History in fragments', pp. 343-54は除く。

定めるのを助けてくれると考えるなら、テキストとその写本伝来の緻密な研究は確実にその社会的論理（複数であり得る）を探究するのに多くの貢献をなします。これはとくに、カロリング期の歴史叙述抜粋集の豊かで多様な伝来に関する研究に当てはまります。フランク王国の歴史史料はメロヴィング期以降、多様な伝達ルートで数多くのヴァージョンでわれわれのもとに伝わっています²³。しかし、それらがより大規模の歴史叙述抜粋集の一部として伝わるようになるのは、カロリング期になってからです²⁴。別のところでもっと詳細に論じることになりますが、この傾向はカロリング期の新たなアイデンティティ政策と結びつけることができます²⁵。トゥールのグレゴリウス、『フレデガリウス年代記』の作者たちや『フランク史書 *Liber historiae Francorum*』の作者といったメロヴィング期の歴史家や年代記作者は、歴史とアイデンティティに関してそれぞれ異なり競合する観念を発展させた²⁶のに対して、カロリング期の歴史記述者達は、それらとは別の新しい歴史叙述の選択肢を付加するよりはむしろ、たいていはそれらの歴史を継続させました。しかし、それらを継続させるにあたってかれらは、こうした古くからの競合する歴史を、フランク人の歴史と未来についての一つの共通のビジョンへと統合するよう努めました。異なる歴史把握を一つの共有される展望の中に吸収していく努力は、8世紀半ば頃にフランク王としてメロヴィング家を廃位した後に、カロリング家をフランク王国の新たな支配者として正当化しようとする試みの中で行われました。しかし、カロリング家とそのエリートの政治的・軍事的成功、かれらの支配の拡大、一つのカロリング帝国の確立、そして激動の9世紀におけるシャルルマーニュの孫たちによる帝国分割というコンテキストにおいて、歴史叙述抜粋集は過去の資源を急速に変わり続ける現在に適合させるのにいっそう重要な道具となりました。歴史叙述におけるカロリング家のスポークスマンたちは時間をかけて作業に勤しみました。彼らはテキストを配置し直し、それらを別の歴史作品と結びつけ、ほとんど目立たない挿入の形で巧妙に変化させることで、それらテキストをフランクの歴史とアイデンティティにみずからを帰属させる様々の必要に適合させたのです。

このことは、9世紀の第二・四半世紀にフランス北西部で書かれたある歴史叙述抜粋集によって簡潔に示すことができます(Codex Paris, Bibl. nat. 10911)。それは三つの歴史叙述テキストからなります。すなわちネウストリア版である『フランク史書』に、『フレデガリウス年代記続編 *Continuationes Fredegarii*』のカール・マルテルの死までを描いた部分と741年～829年までの『フランク王国年代記 *Annales regni Francorum*』が続きます²⁷。これら三つすべては別々の刊本で入手可能で、刊本の編者はその原テキストの生産状況、すなわち作品の「起源 *Sitz im Leben*」を突き止めなければなりません。726/727年に書かれた『フランク史書』は、フランク史の一つの見方を示すもので、「フランク人 *Franci*」というタームを、セヌ・オワーズ川沿いの拠点に集中するネウストリアの政治エリートに限定して用いています²⁸。『フレデガリウス年代記続編』はたいてい、『フレデガリウス年代記』と同じアウストラシア的な観点を正当化する試みを続けている

23 この点については、出版予定の拙著、*Writing for the Future. History, Identity and Ethnicity from the Merovingian to the Carolingian period (5th to 9th cent.)* (Cambridge); id., 'The Art of Truth. Historiography and Identity in the Frankish World', in *Texts and Identities in the Early Middle Ages*, ed. Richard Corradini et al. (Vienna, 2006), pp. 87–104 参照。

24 カロリング期の歴史叙述抜粋集に関する先駆的研究は Rosamond McKitterick による。 *History and Memory*, pp. 28–59 (彼女のそれ以前の研究も合わせて)。彼女の方法的基盤については、*The Carolingians and the Written Word*, pp. 1–22 の序論を参照。

25 Reimitz, *Writing for the Future*.

26 Helmut Reimitz, 'Die Konkurrenz der Ursprünge in der fränkischen Historiographie', in *Die Suche nach den Ursprüngen. Von der Bedeutung des frühen Mittelalters*, ed. Walter Pohl (Vienna, 2004), pp. 191–209.

27 この写本に関する議論と描写については、McKitterick, *History and Memory*, pp. 13–19; Matthias Tischler, *Einharts Vita Karoli. Studien zur Entstehung, Überlieferung und Rezeption*, MGH Schriften 48, 1 und 2 (Hannover, 2001), pp. 1156–58 参照。後者は、この写本がフルー修道院で9世紀末に書かれたとしているが、私はもう少し早い時期に作成された可能性が高いと考えている。私の議論は、'Der Weg zum Königtum', pp. 295f. ならびに下記の註34参照。

28 Richard Gerberding, *The Rise of the Carolingians and the Liber historiae Francorum* (Oxford, 1987); Ian Wood, *The Merovingian kingdoms 450–751* (London, 1994), pp. 257–59.

作品とみなされています。抜粋集の3番目のテキストである742年～829年までの『フランク王国年代記』は、カロリング家中心の新たな歴史叙述の一例として、政治的・社会的中心地はカロリング家がいたところであることを強調する観点から、王権へのカロリング家の上昇を正当化するのを目的としていたとみなされています。そこでは、741年以降のカロリング家の上昇を説明するに際して、カロリング家の王たちがすべてのフランク人 (omnes Franci) の期待と一致して行動したとする主張が、叙述の中心テーマの一つとなっています²⁹。

この写本は、829年までの『王国年代記』版の最古のもの、『フレデガリウス年代記続編』の二番目に古い証拠を含んでいますが、それらがネウストリア版『フランク史書』と組み合わせられている事実は、各テキストの生産時のコンテクストに対する共通の理解に一致しません。カロリング家の成功物語へのネウストリア＝メロヴィングの過去の組み込みは、『続編』と『フランク王国年代記』に通例割り当てられているアウストラシア的特色と釣り合っていないように思われます。しかし、カロリング期の歴史家たちによるメロヴィング朝の過去の併合は、ルイ敬虔帝期の歴史叙述の他の傾向、たとえば830年代における『ダゴベルト事績録 *Gesta Dagoberti*』の作成と調和しています³⁰。メロヴィング朝の歴史をフランク史の歴史叙述に吸収しようとする傾向は、シャルル禿頭王の治世に高みに達します。そのことは、ウィーン写本 (ÖNB lat. 473) や現在サンクト・ペテルブルクにある写本 (NLR) のような他の歴史叙述抜粋集からわかりますが、それらはのちに取り上げて議論します。こうした歴史叙述の傾向を示すもう少し早い時期の証拠は、9世紀最初の20年間のあるときにメスで書かれた『アルヌルフの系譜 *Genealogia domni Arnulfi*』に見て取れます。このテキストの中でカロリング家はメロヴィング家の子孫として描かれているのです³¹。最近イアン・ウッドは、あるカロリング的なコンテクストにおいて作成されたテキスト (たとえば、『続編』や『メッス原初年代記』) に見られる系譜が、西フランキアの貴族集団に対して、共有された過去の中に一つの場所を提供するべく巧みに構築されたことに注意を喚起しました³²。パリ写本 (BnF 10911) の抜粋集の作成にも同様の動機があったかもしれません。この写本では、カロリング家の権力への上昇が予示され、『フランク王国年代記』の omnes Franci (すべてのフランク人) が、歴史叙述によってフランク王国西部のエリートと定められるべく、語りの中に嵌め込まれているのです。

写本には、こうしたフランク史の見方がきわめて入念に織り込まれています。たとえば、『フランク史書』の最後の数章と『続編』の最初の10章の重複を避けるために、ただ後者の10章から24章までが収められています。しかもそこでは、『フレデガリウス年代記続編』のこの部分は『フランク史書』の52～55章として数え上げられています。パリ写本の書体はかなり統一的でエレガントであり、やや古めかしいスタイルで入念に書かれています。写本は確実に829年 (『フランク王国年代記』の終わり) 以降に書き写されたのですが、

29 McKitterick, *History and Memory*, esp. pp. 113–18; Helmut Reimitz, ‘Omnes Franci. Identifications and Identities of the Early Medieval Franks’, in *Franks, Northmen, and Slavs: Identities and State Formation in Early Medieval Europe*, ed. Ildar Garipzanov et al. (Turnhout, 2008), pp. 51–70.

30 *Gesta Dagoberti I. regis Francorum*, ed. Bruno Krusch, MGH SS rerum Merovingicarum 2 (Hannover, 1888), pp. 396–425. このテキストのコンテクストについては、Maximilian Diesenberger, ‘Hair, sacrality and symbolic capital in the Frankish kingdoms’, in *The Construction of Communities. Texts, Resources, Artefacts*, eds. Richard Corradini, Maximilian Diesenberger and Helmut Reimitz (Leiden and New York, 2003), pp. 173–212, 202ff.; Max Buchner, ‘Zur Entstehung und zur Tendenz der ‘Gesta Dagoberti’. Zugleich ein Beitrag zum Eigenkirchenwesen im Frankenreiche’, *Historisches Jahrbuch* 47 (1927), pp. 252–274, 271f.; Léon Levillain, ‘Étude sur l’abbaye de Saint-Denis à l’époque Mérovingienne’, *Bibliothèque de l’École de Chartes* 82 (1921), pp. 5–116, esp. 104ff. 参照。

31 *Commemoratio genealogiae domni Karoli gloriosissimi imperatoris*, ed. Georg Waitz, MGH SS 13 (Hannover, 1881), pp. 245f. この系譜は、アルヌルフの祖父アンスペルトゥスがメロヴィング王クロタールの娘と結婚したと主張している。この系譜に関する基本的な論文として、Otto Gerhard Oexle, ‘Die Karolinger und die Stadt des heiligen Arnulf’, *Frühmittelalterliche Studien* 1 (1967), pp. 250–364 参照。

32 Ian N. Wood, ‘Genealogy defined by women. The case of the Pippinids’, in *Gender in the Early Medieval World. East and West 300–900*, ed. Leslie Brubaker and Julia Smith (Cambridge, 2004), pp. 234–56.

書体の特徴のいくつかは、8世紀末から使用されていた古典的なカロリング小文字を思い起こさせます³³。しかし、写本は829年からほどなくして書かれたように思われます。ベルンハルト・ビショッフは、この写本を9世紀の第二・四半世紀に比定し、その成立地をフランス北西部に位置づけました³⁴。書体を古書体学に基づいて位置づけるのは難しいですが、フォリオ47vと48rの奥付は、この写本がすでに9世紀半ば頃ランスにあったことを示しています。(フランソワ・ドルボーとピエール・デポルトは同じ奥付を、18世紀に写された、9世紀半ばのサン・レミ修道院の所領明細帳の中に見つけました³⁵。)

もう一つ興味深い点は、この写本が二つの部分で同時に書き写されているように思われることです。『続編』の最後に続いてももとは、折丁の終わりまで白紙のページがたくさん続いていました。1200年頃になってようやくテキストが書かれることになるこれら白紙に続いて、『フランク王国年代記』が歴史の語りを引き継ぎ、最初の部分と同じく丁寧に様式化された古めかしい書体で、続く折丁の始めに現れます³⁶。したがって写字生があらかじめ存在する手本か、入念に作られた見取り図にもとづいて作業したのは明らかです。こうした手本や梗概はすでに、過去の提示というよりは、将来を視野に入れたその作成者の政治的意図を反映するようなフランク史のビジョンを含んでいたのです。ルイ敬虔帝の治世最後の10年間にも、シャルル禿頭王の治世初期にも、この写本に見られるような複数の歴史叙述の特殊な組み合わせは、当時現実に見られた政治的な忠誠心のあり方にそぐいません。それゆえ、この歴史叙述抜粋集の生産は、この種の忠誠心を定着させる取り組みの一部と見るべきです。

それゆえ、こうした作品の社会的論理とこれら作品がそこに描かれた社会の現実と取り結ぶ関係を分析したいのであれば、そこに含まれる構想のその後の歴史を考察する必要があります。というのは、それらは静的な現実を反映するというよりは、コンフリクトに満ち変容しつつある社会の現実を処理するプロセスの一部であり、そうした社会的現実の性質と内容は、単にテキストの中身だけからは理解され得ず、そうした作品の伝達と受容に基づいて復元されなければならないからです。パリ写本 (BnF lat. 10911) に含まれる歴史叙述抜粋集は、こうしたアプローチに特に適しています。大変幸運なことに、パリの抜粋集から100年とたたずに書かれた二つの写本が残っており、ともに『フランク史書』、『フレデガリウス年代記続編』、『フランク王国年代記』というパリ写本に見られた三つのテキストの組み合わせに基づいているからです。二つの写本とともに、他のテキストがこの三つ揃いテキストに加えられました。

サン・タマン修道院で書かれたより古い写本 (Vienna ÖNB lat. 473) では、語りは、アインハルト『シャルルマーニュ伝』、二つの系譜テキストと『教皇列伝』によって拡大されています。これらはパリ写本からおよそ30年ほど後にまとめられましたが、丹念な書冊学上の検討が示しているように、写本編纂者たちはたいてい既存のテキストを用い、われわれがこんにち「カット・アンド・ペースト」と呼ぶ方法でそれらを

33 この写本の図像については、Reimitz, 'Der Weg zum Königtum', pp. 315 and 316 (fol. 56v/57r and 57v/58r).

34 ベルンハルト・ビショッフの死後出版された *Katalog der festländischen Handschriften des neunten Jahrhunderts* の編者である Birgit Ebersperger に対して、ビショッフのメモに基づく情報を与えてくれたことに感謝したい (e-mail vom 24. 4. 2001)。ビショッフもまた、ピエール・デポルトとフランソワ・ドルボーへの手紙の中でこの写本を9世紀の第二・四半世紀としていた。Pierre Desportes and François Dolbeau, 'Découverte de nouveaux documents relatifs au Polyptique de Saint-Remi de Reims. A propos d'une édition récente', *Revue du Nord* 68 (1986), pp. 575–607, here 585, with note 35.

35 Desportes and Dolbeau, 'Découverte de nouveaux documents', with images of the colophon in the copy of the polyptique (Carpentras, Bibl. Ing. 1779, fol. 319v/320r) and in Paris BnF lat 10911 (fol. 47v/48r) on p. 584.

36 高い質の書体を異なる写字生に割り当てるのは難しいが、書冊の特徴は明らかに、二人の書記が同時にこの写本作成に携わり、それぞれが仕事を終えてから二つの部分を合わせたことを示している。Tischler, *Einharts Vita Karoli*, p. 1157 参照。

配置し直しました³⁷。ただし、『フランク史書』は、テキストそのものが巧妙に書き直されているので、その折に書かれたはずです。そこに見られる削除や改変ははっきりと目立つものではありませんが、実際にはフランク人のために新たな射程を生み出しています。古きフランク史の地平を、『フランク史書』の本来の著者であれば、真のフランク人ではなくむしろアウストラシア人、つまり *Franci superiores* とみなしたであろう人々の領域にまで拡大しているからです。別のところで長々と論じたように、この歴史書は、シャルル禿頭王のために書かれまとめられました³⁸。その背景をなすのはおそらく、869/70年におけるシャルルによるロタリングア、すなわち西フランク王国と東で接し、亡くなったばかりの甥ロタール2世の王国の征服と短い支配です。抜粋集に組み入れられた『フランク史書』は、シャルル禿頭王による甥の「王国 *regnum*」の継承を正当化するために、メロヴィング王国東部の住民であったアウストラシア人をフランク史から完全に取り去ってしまったのです。このコンテキストにおいてフランク史が再定義されたのを示すのは、『フランク史書』の書き換えだけではありません。諸テキストの独自の配置もまた、西フランクの系譜に沿ってフランク史が作られているのを示しています。写本の末尾でフランク人の歴史全体が系譜のように作られた短い歴史の要約によってまとめられ、この要約はカロリング家をネウストリアの「宮宰 *maior domus*」の子孫として提示してさえいるのです³⁹。結局のところ、その甥の王国におけるシャルル禿頭王の支配は一年も続かなかったため、この抜粋集が提供する特殊なモデルも存続することはありませんでした。

もう一つの抜粋集は、後の世代の歴史家により大きな影響を与えることになる歴史を提示しており、同じく『フランク史書』、『フレデガリウス年代記続編』、『フランク王国年代記』を核としています。こんにちサント・ペテルブルクにあり、10世紀初頭に書かれた写本は、それらに加えて二つのテキスト、すなわちアインハルト『シャルルマーニュ伝』とアストロノムス『ルイ敬虔帝伝』を含んでいます⁴⁰。まさにこのテキスト群が12世紀終わり頃にサン・ドニ修道院の歴史叙述の工房で使用され、『フランス大年代記』においてフランク人の初期史の主要な史料となった歴史書を生み出すこととなります⁴¹。

中世盛期におけるこの集成の社会的論理を探究する作業にも惹かれるのですが、私はパリとサント・ペテルブルクから伝わる二つの写本が証言するような、9・10世紀におけるカロリング期の歴史に集中したいと思います。これら写本に伝わる様々のテキストの近代の編者たちが気づいているように、二つの写本のテキストは非常に多くの部分を共有しています。しかし、その他の証跡が示すのは、ペテルブルク写本がパリ

37 Reimitz, 'Ein karolingisches Geschichtsbuch', pp. 40–51 参照。これら書冊の分析が示す事柄は、以下の研究によって十分に考慮に入れられていない。Roger Collins, *Die Fredegar-Chroniken*, MGH Studien und Texte 44 (Hannover, 2007), p. 124。コリンズは、この写本が二つの独立した部分からなること、つまり一方は『教皇列伝』、他方はフランク史関連テキストという別々のものであると述べることで私の考えに反論できると考えている。しかし、これら異なる部分の書冊学上・古書体上の特徴はこの書物がはるかに複雑な歴史を有していることを明らかにしている。

38 Reimitz, 'Ein karolingisches Geschichtsbuch'。この時期にシャルルを父ルイと祖父シャルルマーニュの皇帝位の優先的な相続人として示そうとする試みが集中したこと、その歴史的な背景については、Janet Nelson, *Charles the Bald* (London, 1992), pp. 221–53 参照。

39 このテキストの校訂は、Reimitz, 'Ein karolingisches Geschichtsbuch', p. 52f. 参照。

40 St Petersburg, NLR F v IV. 4。以下の文献における議論と描写を参照。Ernst Tremp, *Die Überlieferung der Vita Hludowici des Astronomus*, MGH Studien und Texte 1 (Hannover, 1991), pp. 50–53; Tischler, *Einharts Vita Karoli*, pp. 1163–77; Rosamond McKitterick, 'Charles the Bald and his library. The patronage of learning', *English Historical Review* 95 (1980), pp. 28–47; and now: *History and Memory*, pp. 58, 112.

41 この歴史叙述の伝統との重要な結びつきを（再）発見したのは、Bernd Schneidmüller, 'Ein Geschichtskompilium des frühen 13. Jahrhunderts aus St. Denis (Vat. Reg. lat. 550) als Vorläufer der Grandes Chroniques', *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken* 67 (1987), pp. 447–61, Gabrielle M. Spiegel, *The Chronicle Tradition of St. Denis. A Survey* (Brookline, Mass. and Leiden, 1978), pp. 68–71。同じく Pascale Bourgain, 'La protohistoire des Chroniques latines des Saint-Denis (BNF, lat. 5925)', in *Saint-Denis et la royauté. Études offertes à Bernard Guenée*, ed. Françoise Autrand / Claude Gauvard / Jean-Marie Moeglin (Histoire ancienne et médiévale 59, Paris, 1999), pp. 375–94, and Tischler, *Einharts Vita Karoli*, pp. 1203–1311 参照。中世盛期フランスにおけるカロリング期の歴史については、Matthew Gabriele, *An Empire of Memory. The Legend of Charlemagne, the Franks, and Jerusalem Before the First Crusade* (Oxford, 2011)。

写本を直接写したものであるというよりは、ペテルブルクの「歴史書」を構成するすべてのテキストを含んでいたある抜粋集の写しであったと思われることです⁴²。それゆえ、パリの抜粋集は、特定の歴史叙述の伝統が定着するための出発点と見なせます。

テキストの類似以上に目を引くのは、書冊学上の類似です。『フレデガリウス年代記続編』から『フランク王国年代記』への移行が示すように、続く編者たちは非常に注意深く原典にしたがっています。サンクト・ペテルブルク写本では、パリ写本と同じように、この二つのテキストが同じ数の白紙ページで分けられているのです。ただし、サンクト・ペテルブルクの抜粋集では、パリ写本と異なり、これら白紙ページは折丁の終わりから新しいその始まりにかけて挟まれているのではなく、折丁の真ん中に置かれています⁴³。この点は、サンクト・ペテルブルク写本がパリ写本を手本としていなかったと考えるなら、大いに驚くべきです。つまり、『続編』と『王国年代記』の間の白紙ページですら、写本の第三世代まで保持され続けたということです。

11世紀初頭まで、サンクト・ペテルブルク写本はソワソンのサン・メダール修道院に保管されていました。そのことは、『王国年代記』の750年の記事に付加された記述からわかります。この付加は、メロヴィング朝最後の王キルデリク3世がピピンによって廃位された後、剃髪され、*in monasterio sancti Medardi quod situm est in Suessionis civitate* (ソワソン市のサン・メダール修道院で) 過ごしたと述べています⁴⁴。『ルイ敬虔帝伝』を校訂したエルンスト・トレンプは、『ルイ敬虔帝伝』の最古の写本でもあるペテルブルク写本の成立地を特定するのにやや躊躇し、書体の様式がランス写字室の強い影響を受けているのを主たる理由として、フランス北部の可能性を提案しました。しかし、マティアス・ティシュラーは、サンクト・ペテルブルク写本を9世紀末と10世紀の30年代頃までにソワソンで作成された写本と比較することで、この写本がソワソンで書かれたはずであるとの結論に達しました⁴⁵。彼は、書体の様式へのランスの影響を、ソワソンのアボの時代に見られるソワソンとランスの密接な結びつきによって説明しています。アボは、有力なヴェルマンドワ伯エリベール2世の息子で、未成年にもかかわらずランス大司教となったユークの事件を担当していました⁴⁶。当時ソワソンにおいて、カロリング家の歴史、とくにルイの治世に対する関心が大いに高まっていたことは、930年以降に死亡したオディロの作品から証明されます。というのは、彼はその『聖セバスティアヌスの奉遷』のために、『ルイ敬虔帝伝』の第40章と『王国年代記』の826年の記事を利用することができたからです。この二つのテキストともにサンクト・ペテルブルク写本でも伝わっています。さらにルイ敬虔帝の治世に対するオディロの関心は、『奉遷』に続く『奇跡譚』にも反映されています。そこには、833年ソワソンでのルイの幽閉事件の説明が組み込まれているのです。この事件は、『ルイ敬虔帝伝』で長々と述べられているもので、この伝記に関する最古の証拠がサンクト・ペテルブルク写本なのです⁴⁷。

この抜粋集の内容は、サン・メダールの俗人修道院長かつソワソン、モー、ヴェルマンドワの伯であった

42 Tremp, *Die Überlieferung*, pp. 50–53; Tischler, *Einharts Vita Karoli*, p. 1166, with nn. 809–10.

43 St. Petersburg, NLR F v IV. 4, fol. 35r–37r. 折丁は33rで始まり、39vで終わる (fol. 36 and 37のあいだの一葉は欠けている)。

44 St. Petersburg, NLR; fol. 38r, cf. *Annales regni Francorum s. a 750*, ed. Friedrich Kurze, MGH SS rerum Germanicarum in usum scholarum [6] (Hannover, 1895), p. 10 with n. *.

45 Tischler, *Einharts Vita Karoli*, p. 1167f.

46 Michel Sot, *Un historien et son église. Flodoard de Reims* (Paris, 1993), pp. 320ff. 参照。

47 Tremp, *Die Überlieferung*, pp. 50–53 with Tischler, *Einharts Vita Karoli*, pp. 1167–69.

エリベール2世とその側近にとっても関心を引くものだったかもしれません⁴⁸。彼はイタリア王ベルンハルドゥスの直系の子孫でした。その父エリベール1世は、ランス司教フルコとともに、カロリング家出身のシャルル3世の国王選出に決定的な役割を果たしました。シャルル3世とロベール1世との争いにおいて、エリベール2世は923年に支持陣営を変え、ロベールの死後には、ブルゴーニュのルドルフを新たな王として支持しました。この王は923年にソワソンで戴冠されました。シャルル3世はエリベールによって捕虜とされ、エリベールはその報酬としてルドルフから、自分のまだ未成年の子供ユグをランス大司教として就任させてもらったのです。しかし、自身の地位を計画的に築こうとしたエリベールの試みは、直ちにルドルフと衝突することになり、927/928年にエリベールはシャルル3世を解放し、彼に臣従礼を捧げ、彼をランスへと連れてくることになりました。しかし、エリベールは再びルドルフと結託するや、またもやシャルル3世を監禁状態に置きました。

920年代後半の混乱した時代に、ヴェルマンドワ伯らの影響圏内、ソワソンやランスにいた人々が、サンクト・ペテルブルク写本に見られるような歴史叙述抜粋集に関心を寄せたであろうことは容易に想像できます。「フランク人」（セヌ・オワーズ川沿いの政治エリートとされている）とその王とのあいだの権力バランス、名ばかりの王の廃位、さらには（アストロノムス『ルイ敬虔帝伝』や『フランク王国年代記』で描かれているような）支配者の廃位、監禁、復位といった一連のテーマは、10世紀初頭の政治にとって重要であった可能性が極めて高い関心事でした。

サンクト・ペテルブルク写本の、『フレデガリウス年代記続編』と『王国年代記』の間の白紙ページの中に、ヴェルマンドワ伯がカロリング朝の歴史にもっと特定の利害を有していた可能性を見いだすことができるかもしれません。写本の作者たちは、写しの中に空白となっていた空間があるのを無視しようとは望まなかったのですが、その空間を532年～810年までの短い年代記を挿入するのに用いました⁴⁹。その年代記にはたくさんの短い記事が書き込まれ、697年以降のカロリング家の支配者の即位と死が言及されています。興味深いことに、これらの簡潔な歴史上の記録が、最後の記事の一つとして、810年シャルルマーニュの息子であるイタリア王ピピンの死に言及していることです。ピピンはヴェルマンドワ伯エリベールの高祖父なのです。したがってこの写本は、西フランクにおける有力家門のネットワークの内部で生み出されたのです。これら有力家門は当時、支配するカロリング家の王たちと同等であり、その正当な政治的パートナーであることを喧伝するために、彼らの影響圏がメロヴィング朝支配下フランク王国のかつての政治的な中心地と一致すること、そしてかれらが黄金時代のカロリング家の支配者たちの子孫であることを強調しようと努めていたの

48 Robert Fossier, 'Le Vermandois aux X^e siècle', in *Media in Francia. Recueil de mélanges offert à Karl Ferdinand Werner à l'occasion de son 65^e anniversaire* (Paris, 1989), pp. 177–86; Régine Le Jan, *Famille et pouvoir dans le monde franque (VII^e–X^e siècle) Essai d'anthropologie sociale* (Paris, 1995), s. v. Herbert II.; Helmut Schwager, *Graf Heribert II. von Soissons, Omois, Meaux, Madrie sowie Vermandois (900/06–943) und die Francia (Nord-Frankreich) in der 1. Hälfte des 10. Jahrhunderts* (Kallmünz/Opf., 1994); Karl Ferdinand Werner, 'Untersuchungen zur Frühzeit des französischen Fürstentums V.', *Die Welt als Geschichte* (1960), pp. 87–119; id., 'Die Nachkommen Karls des Großen (1.–8. Generation)', in *Karl der Große. Lebenswerk und Nachleben* 4, ed. Wolfgang Braunsfels and Percy E. Schramm, Düsseldorf 1967, pp. 403–482, 458.

49 このテキストは次のタイトルで校訂されている。 *Annales Bawarici breves*, ed. Georg H. Pertz, MGH SS 20 (Hannover, 1868), p. 8. しかし約1世紀前に、Friedrich Kurze, 'Die Annales Laubacenses und ihre nähere Verwandtschaft', *Neues Archiv für ältere deutsche Geschichtskunde* 39 (1914), pp. 13–41, 41は、それらを *Annales regum Suessionenses* と呼ぶよう提案している。というのも、それをバイエルンに結びつけるものはテキストの中に全く見られないからである。Lothar Boschen, *Die Annales Prumienses. Ihre nähere und weitere Verwandtschaft* (Düsseldorf, 1972), pp. 143–47も参照。

です⁵⁰。

また、歴史書の筆写のコンテキストを、ランスからソワソンへの歴史叙述の輸出として見ることで、伝承されてきたテキストの中から特定のテキストが注意深く選ばれたことも明らかになります。ランスの蔵書は、とりわけ10世紀初頭には、代わりに選択されうるような歴史書や歴史叙述抜粋集を数多く提供したかもしれません。たとえばランス大司教ヒンクマールは、おそらくその『サンベルタン年代記 *Annales Bertiniani*』を、より大規模の抜粋集に組み込みました。この抜粋集はなお『サンベルタン年代記』のたいていの写本に残っています。その最古のもの (St. Omer, Bibliothèque munic. 697 and 706) が、ランスの写本を基にしているのはほぼ確実です。この写本では、『サンベルタン年代記』のヒンクマール執筆部分とプルデンティウス執筆部分ともに抜粋集の末尾をなしています。『フランク王国年代記』も同じ抜粋集に見られますが、ローマ史に関する数多くのテキストやトゥールのグレゴリウス『歴史十書』のカロリング版もそこには含まれていません⁵¹。同じく900年頃から、さらに二つの写本が伝わっています。一つは、『フレデガリウス年代記』に、その続編だけでなく『ロルシュ年代記』改訂版と806年までの『王国年代記』が続くランス写本です⁵²。もう一つは、今日ロンドンに保管されている写本 (MS Arundel 375) で、9世紀末頃のランスと関わりがあり、アウストラシア版の『フランク史書』を『メッス原初年代記』の一部と結びつけて収録しています⁵³。

したがって、サンクト・ペテルブルク写本で証明されるようなランスからソワソンへの歴史叙述の伝達が、ある社会的な論理と関連していることは明らかです。この社会的論理が、テキストの入念な選択と伝達とを支配していたのです。この抜粋集が、すでに確立していた一つの歴史の見方や解釈、たとえばパリ写本に見られるような歴史ビジョンにどの程度まで依拠していたかを決定するには、二つの写本を比較する以外に方法はありません。こうした比較にあたっては、写本によって共有されている選択を調査するだけでなく、選ばれたテキスト資源をコントロールするために取られた共通の戦略を考慮しなければなりません。すでに確立されていた歴史叙述の伝統が有する社会的論理につながり合わせることがどれほど重要であったかは、とりわけ二つの写本、パリ写本 (BnF lat. 10911) とサンクト・ペテルブルク写本 (NLR F v IV. 4) の構成に明らかな真正性への関心の中に見て取ることができます。写本における戦略、すなわち収録されているテキストの編纂や編成の中に見られるこうした戦略の比較は、シュピーゲルが提案するようなかたで、「テキストの特定の位置づけ」をより正確に探究するための多くの機会を新たに提供してくれます。私が、カロリング期とその後期から伝わる若干の事例で証明しようと努めたように、中世のテキストとその伝来を歴史プロセスの一部として比較するのを、しかもこうした比較のための主要な参照点として「唯一の」原典という捉え方が巻き込む諸観念に頼ることなくそうするのを手助けしてくれます。中世のテキストの社会的論理をその伝

50 10世紀にカロリング朝の伝統をわがものとしようとする動きが見られることについては、Bernd Schneidmüller, *Karolingische Tradition und frühes französisches Königtum. Untersuchungen zur Herrschaftslegitimation der westfränkisch-französischen Monarchie* (Wiesbaden, 1979); id., *Nomen patriae. Die Entstehung Frankreichs in der politisch-geographischen Terminologie* (Nations 7, Sigmaringen, 1987) bes. 17ff.; Michel Sot, 'Hérédité royale et pouvoir sacré avant 987', *Annales ESC* (1988), pp. 705–33; Régine Le Jan, 'Continuity and change in the tenth-century nobility', in *Nobles and Nobility in Medieval Europe*, ed. Anne Duggan (London, 2000), pp. 53–79 参照。

51 St. Omer, Bibliothèque municipale 697+706. 現在は二つの部分に分けて保管されている。最初の部分 (cod. 697) は以下のものを含む。Eutrop, *Historia Romana*; Marcellinus Comes, *Chronicon*; Notitia Galliarum and the second: Gregory of Tours, *Historiae*; Fredegar book IV cum continuationibus c. 24; *Annales regni Francorum*; *Annales Bertiniani*. この写本ならびに『サン・ベルタン年代記』の他の写本については、*Annales de Saint-Bertin*, ed. Felix Grat, Jean Vieillard and Suzanne Clémencet (Paris, 1964) XXIIff. また『サン・ベルタン年代記』の英訳において写本伝来が議論されている。Janet Nelson, *The Annals of St Bertin* (Manchester, 1991), pp. 15f. 参照。

52 Vatican, Reg. lat. 213. この写本のより完全な描写は、Collins, *Die Fredegar-Chroniken*, pp. 96–99に見られる。

53 London, BL MS Arundel 375; cf. Yitzhak Hen, 'Canvassing for Charles: The Annals of Metz in Late Carolingian Francia', in *Zwischen Niederschrift und Wiederschrift. Frühmittelalterliche Hagiographie und Historiographie im Spannungsfeld von Kompendienüberlieferung und Editionstechnik* (Vienna, 2010), pp. 139–46.

来の中に探る試みは、はるかに柔軟な展望を与えてくれます。かくして共時的だけでなく通時的な比較においてテキストとコンテキストの持続的な緊張関係を探求し、テキストが書かれたときの社会的コンテキストから、その社会的論理を基盤としたり、発展させたり、場合によっては避けたりする将来の試みにいたるまで追跡することが可能となるのです。このことは、中世の抜粋集に関する研究に関してとくに重要です。というのも、いくつかのテキストがどのようにして特定の社会的論理に結びついていたかという問題だけでなく、いくつかの社会的論理が中世において、あるテキストの、あるいはこの意味で研究集会のタイトルを用いるならば、「テキスト布置」の確立にどのように影響を及ぼしたかという問題を探究するのを可能にしてくれるからです。

(加納 修・田中玉美 訳)